

森下博三氏を悼む

森下博三氏は、昨年夏以来体調をくずされて、神奈川県伊勢原市にある東海大学医学部付属病院で検査、加療に努められて居りましたが、7月2日結腸がんのため逝去されました。享年71才。天文台在職中は「かもしか仙人」というニックネームで誰からも親しまれ、また古武士のごとき気概を持ち、信義に厚い方でした。

森下氏は岐阜県高山市のお生まれで、気象台にお勤めでしたが、1949年乗鞍コロナ観測所建設に当たり、その試験観測から参加されご活躍されました。もし乗鞍に森下氏がおられなかったら乗鞍コロナ観測所が実現したかどうかさえ疑問に思えるほどです。当時日本で日食時以外にコロナの観測をしようとする計画を戦前から意欲的に取り組んでおられた故野附教授が北アルプス南端の乗鞍岳山頂近くで試験観測を計画され、その時始めて森下氏が同行されました。以後野附教授のご指導のもとで超人的な体力と気力を発揮され、数々の難関を乗り越って教授念願の観測所を乗鞍岳に開設することに尽力されました。森下氏以外のスタッフの全員は天文学については玄人であっても、三千米級の山岳については全くずぶの素人集団で登下山に関しては、それこそ手取り足取り全員が森下氏のお世話になりました。

森下氏はその頃既に地元山岳会から畏敬の念を込めて「かもしか仙人」と呼ばれ、天文台に所属してからもその通称が引き継がれ殆ど公式ネームとして通用しました。しかもこの通称は文部省、東大でも知られ、なかには通称と知らずに本名と思っていた人もいたくらいでした。私なども1953年天文台に入り最初に覚えた先輩の名が「仙人」でありその後永いお付き合いの中で「森下さん」と呼び出したことは殆ど無く、今ここで「森下氏」と書くこと事体に違和感を覚えています。

1977年に25 cmクーデ型コロナグラフ背面に取り付けられた20 cm単色写真儀は通称「仙人カメ

ラ」とも呼ばれ、太陽面の解像度の高い水素H α 線単色像を写真撮影する装置で、仙人はこのカメラで数々の貴重な太陽面現象を撮影しました。南アルプスの稜線がほのかに明るくなってきた夏の夜明け、西側の北アルプスの槍や穂高は紫色の夜のしじまに沈んでいます。観測所の廊下を遠慮がちに歩く音、しばらくするとドームの開く音が聞こえてきました。真夏とはいえ山頂の空気は摂氏5度と冷たく、一遍に眠気など吹き飛んでしまいます。仙人は今日撮影する長尺フィルムのマガジンを幾つも用意し台車に乗ってスタンバイ。なにしろ撮影装置は焦点距離8.8 mの望遠鏡の背面に取り付けられているため撮影位置はドームの床から5 mの高い位置となり早朝、夕方の観測はきついものがありました。勿論このカメラには自動撮影装置は取り付けられて



いましたが、より良い像を撮影するためにはシンチレーションの揺らぎをできるだけ除去し「シンチレーションと一心同体となり、その呼吸を計り一瞬の像の停止を狙ってシャッターを切らなければならない」との信念のもと、その手際の良さは仙人ならではのものがありました。こうして撮影されたフレアやプロミネンスのフィルムは今でも重要な観測資料としてファイルされ、国内は勿論諸外国でも参考資料としてレポートの中に引用されています。

私生活では剣道の有段者であり、茶道具の制作や漆器作りは玄人並みの作品を残し、よく後輩や知人の祝い事に贈られ喜ばれていました。

顧みれば、森下さんのご生涯は、凡人には真似のできない誠一直線で、妥協を知らぬ美しさで貫かれておりました。私どもは在りし日の仙人を偲び、数々の教訓に身を引き締めながら、ご冥福を祈ります。

深津正鉄（元国立天文台）